

ブラジル奄美移民のアイデンティティーについての一考察

—— COMUNIDADE AMAMI による「UNDOKAI（運動会）」を事例に ——

加 藤 里 織

KATO Saori

非文字資料研究センター 2017 年度奨励研究採択者
神奈川大学大学院歴史民俗資料学研究科 博士後期課程

【要旨】1908 年に最初の契約移民ら 781 人がブラジルへ渡って以来、現在までに推定 25 万人が日本から地球の反対側へと移住した。彼らの多くがファゼンダと呼ばれる農場で、コーヒーや綿糸として蔬菜作りに精を出し、ブラジル社会の農業分野で活躍した。2018 年は最初の「笠戸丸」移民がサントス港に到着してから、ちょうど 110 年の節目の年にあたる。現在は六世まで生まれ、約 190 万人の日系人がブラジルに暮らしている。

ブラジル日系社会で最古の歴史を誇る鹿児島県は、戦前・戦後合わせて約 1 万 6703 人をブラジルに送り出した「移民が盛んな県」の一つである。その県本土から約 380 キロ南西に位置する奄美群島。この小さな島々からも戦前・戦後を合わせて 167 世帯 872 人がブラジルへと渡っている。ブラジル奄美会という相互扶助団体（郷友会）を組織するなど、強い郷土愛を持つブラジル奄美移民。しかし、鹿児島県を母県とするブラジル奄美移民は、従来のブラジル移民史研究の中で鹿児島というくくりの中でまとめられてしまい、その独自の位置についての指摘がされてこなかった。

本研究では、鹿児島県の奄美群島地域からブラジルへと渡ったブラジル奄美移民に注目し、移住（移民）をした人々がどのように「奄美」文化の継承を行い、それが二世、三世らにどのような影響を及ぼしているのかを明らかにすることを目的とする。中でも、特に戦前期にブラジルで生まれた奄美の、主に宇検村の二世世代が中心となって毎年開催している「運動会」での聞き取りを中心に、ブラジル奄美移民のアイデンティティーがどのように受け継がれているのかを明らかにする。そして、ブラジルで受け継がれている「奄美」アイデンティティーが、奄美の母村へと還流し、それがどのような形で母村側に影響を与えているのかについて考察する。

Views on Immigrants from the Amami Islands to Brazil with an Emphasis
on Undokai (Sports Festival) Organized by Comunidade Amami

Abstract : Since 781 Japanese immigrants first arrived in Brazil in 1908, a further 250,000 people are believed to have moved to this country halfway around the world from Japan. Many of them were contracted to work on farms called Fazenda and engaged in the production of coffee beans, cotton and vegetables, contributing to the development of the agricultural industry in Brazil. The year 2018 marked the 110th anniversary of the first immigrants arriving on the ship Kasatomaru at the Port of Santos. Currently, 1.9 million Japanese descendants live in Brazil, with some families

in their sixth generation.

Kagoshima Prefecture boasts the longest history of immigration to Brazil. It is among the prefectures with the highest number of such immigrants, having sent a total of 16,703 people over the course of history. The Amami Islands are located 380 kilometers south-southwest of mainland Kagoshima Prefecture. From these small islands, 872 people comprising 167 families have migrated to Brazil up till now. Their strong attachment to their ancestral home took form in the establishment of a beneficial association called Amami Immigrants in Brazil. However, historical studies on immigration to Brazil merely regard these people as being from Kagoshima and neglect their unique identity.

These Amami immigrants in Brazil are the focus of this paper. How they passed down their culture from generation to generation and how it affected the second and third generations will be examined. The author interviewed Amami immigrants about their annual sports festival held by the second generation mainly from Uken Village and born in Brazil prior to World War II. Based on these interviews, how they maintain their identity will be revealed. Moreover, how the passed-down Amami identity is brought back to their ancestral home and influences the local people will be discussed.

はじめに

日本のちょうど反対側に位置するブラジルへ、1908年に「笠戸丸」で最初の契約移民ら781人が渡って以来、現在までに推定25万人が日本から移住をした。彼らの多くが、ファゼンダと呼ばれる農場で、コーヒーや綿、蔬菜などを作り、ブラジル社会の農業分野で活躍してきた。現在は六世まで生まれ、約190万人の日系人がブラジルに暮らしている。

2018年は最初の移民船「笠戸丸」がブラジルに到着してから110年目にあたり、ブラジル日本人移住110周年の記念すべき年として、ブラジル各地で様々な祝典や関連イベントが企画、開催されている。7月21日には、日系人が最も多く暮らすサンパウロにおいて「日本移民110周年記念式典」が開催され、日本からは18に及ぶ各都道府県関係者ら200人の慶祝団と、皇室から秋篠宮眞子様もご臨席され、総勢4000人が集い盛大な式典となった⁽¹⁾。

日本移民110周年記念式典の翌日、同会場の別室にて、ブラジル最古の歴史を誇る在伯鹿児島県人会の県人会創立105周年記念式典も開催された。鹿児島県からは、最初のブラジル移民である「笠戸丸」の契約移民として172人がブラジルへと渡り、以来1万6703人の移民をブラジルへと送り出してきた⁽²⁾。

本研究はこの鹿児島県に属し、鹿児島本土から南西に約380キロメートルに位置する奄美群島からブラジルを目指した人々に注目し、ブラジル移住が移民のアイデンティティーに与えた影響やその後の文化継承について考察を試みるものである。

中でも、特に戦前期にブラジルで生まれた奄美、主に宇検村の二世世代が中心となって毎年開催している「運動会」での聞き取りを中心に、ブラジル奄美移民のアイデンティティーがどのように受け継がれているのかを明らかにすることを目的としている。宇検村という同村出身者たちによる文化継承が、ブラジル生まれの二世や三世など、その子弟たちにどのような影響を及ぼしたのかを示し、ほかの日本人移民とは異なるアイデンティティーを持つブラジル奄美移民の特徴について考察する。

I 先行研究と問題の所在

(1) 先行研究

ブラジル移民に関する研究はすでに多くの蓄積があるが、奄美からブラジルへ渡ったものを対象とした研究は少ない。わずかな先行研究を挙げるとまず、田島康弘「奄美とブラジル移民」(1997年)⁽³⁾がある。田島は宇検村とブラジル間の人の移動について、奄美での聞き取り調査などを基に移動量と移動の方向、移動者の経験などの全体像を明らかにした。のちに宇検村の資料を用いて近代期における奄美のブラジル移民研究を行った宮内久光⁽⁴⁾は、田島論文が依拠した人物伝や聞き取り調査は回想的な情報であり、「これらを用いて近代期の移民状況を復元するには、資料的な限界がある」と指摘している。⁽⁵⁾そこで宮内は、宇検村役場所蔵の「宇検村長室保存文書」を用いて、それまで不明だった宇検村からのブラジル移民の送り出し状況の一端を明らかにした。また宮内はブラジルだけではなく宇検村は「南洋群島や満州といったいわゆる外地への移民も盛んであった」と述べ、その理由について、「1920年代以降に顕在化する人口圧に対する村民の対応の結果」であると指摘し、この宇検村の移民先については「出郷時の日本の勢力圏の範囲や日本政府の政策、当時の国際関係により規定された」と考察している。宮内は近代期の宇検村を研究対象地域とし、移民の移動パターンと移動要因、移動プロセスを概説的に説明し、宇検村からの移民送出の特徴についても考察を行っている。宮内論文で述べられている、その特徴とは、宇検村では移民送出に行政機関である宇検村役場が積極的に関与して、官民一体となった移民送出システムが構築されていたことであるという。このように宮内の研究により、近代期の宇検村移民像が明らかになった。しかし宮内もまた、宇検村資料に依拠した研究であったため、宇検村のみが研究対象となっており、奄美全体からブラジル移民を捉えることがされていない。また、田島と宮内に共通していえるのは、奄美（特に宇検村）資料のみを用いての調査・研究であったため、ブラジル側での調査は全くといっていいほど行われておらず、現在まで、ブラジルからの視点でブラジル奄美移民を捉えた研究はない。このように今現在、奄美とブラジル双方から奄美全体を包括した「ブラジル奄美移民史」研究は存在していないのだ。そこで本研究では、ブラジルでの調査を行い、ブラジル側の資料を基にブラジル奄美移民史を描いてみようと思う。

(2) 問題の所在と研究目的

田島によると「日本の近現代史の中で、奄美出身者が本土の主として大都市部に移住を余儀なくされ、知友などの手掛かりのない異郷の地で生活を構築していくために、互いに励まし合い、寄り添って「郷友会」と呼ばれる集団を形成して活動してきたことは、よく知られている」⁽⁶⁾という。筆者はこうした現象は国を離れても起こりうるのかに興味を持ち、ブラジルを事例にその実態や本質を解明したいと考えた。そこで本研究では、まずブラジル在住の奄美移民（一世）とその子孫たち（二世、三世）の概要を把握し、彼らへの聞き取り調査を通じて、ブラジル奄美移民の実態を明らかにする。特に奄美の「移民村」である宇検村移民とその子弟たちの活動の一つである運動会を事例として取り上げ考察を行う。奄美で最もブラジル移民を輩出した宇検村移民とその子弟に注目することによって、ブラジル奄美移民の全体像が浮かび上がるのではと考えるからである。

(3) 研究の方法

本研究では、奄美出身者、特に宇検村出身者たちがブラジルのサンパウロで毎年開催している運動会に参加し、その主催者である「COMUNIDADE AMAMI (コムニダーデ・アマミ)」という団体の実態を明らかにし、そこに属しているブラジル奄美移民とその子弟である奄美系ブラジル人のオーラルヒストリーを通して、ブラジルにおける奄美アイデンティティについて考察を行う。

調査は運動会が開催された 2017 年 9 月 24 日を中心に、ブラジルのサンパウロ州サンパウロ市内にて、9 月 17 日から 9 月 27 日に行った。また、同年 10 月 12 日から 14 日に、奄美大島の宇検村において、筆者と宇検村教育委員会との共催で「ブラジル移民談話会」を開催した。ブラジル移民の家族や、帰国者または 90 年代にデカセギとして来日し、宇検村出身者と結婚し宇検村で生活を送っている日系ブラジル人に集まってもらい、宇検村におけるブラジル移民への意識についてなど、意見交換を行った。このときの聞き取り調査を通して、移民送り出しの母村におけるブラジル奄美移民の位置付けについて考察を行う。

II ブラジル奄美移民の概要

(1) ブラジル奄美移民

1888 年奴隷解放により労働者確保が急務となったブラジルでは、積極的な外国人移民の誘致を行った。1892 年には日本人移民導入が決定したが、当時はまだ日本とブラジルの間に修好通商条約が未締結であったため、移民誘致は実現しなかった。1905 年ブラジルに着任した杉村公使はブラジル大統領などから相次いで移民の申し入れを受け、大至急でサンパウロ州視察の復命書を作成し日本へと送った。その復命書を読み、新興の移民会社である皇国移民合資会社の業務担当者である水野龍は早速ブラジルへと渡った。水野はサンパウロ州との交渉を経て、1907 年移民契約を締結。こうして 1908 年 781 人が「笠戸丸」でブラジルへと渡った。これがブラジル日本人移民の始まりである。

このように 1908 年から始まった日本人のブラジル移民は、1972 年に移民船での移民が廃止になるまで、推定 25 万人がブラジルへと渡り、現在では 190 万人ともいわれるほどの「日系社会」を築くまでになった。ブラジルへ渡った人々の多くが西南日本、特に九州や沖縄の人々であった。

本研究で対象としている「奄美」とは、鹿児島から南へ約 380 キロメートルのところに位置する奄美大島を含む奄美群島全体を指す。群島の中心である奄美大島の面積は約 712 平方キロメートル、人口約 6 万人の鹿児島県に属する小さな島である。先にも述べたように、奄美大島の母県にあたる鹿児島県ブラジル移民の歴史は 1908 年の「笠戸丸」移民から始まる。この笠戸丸に乗船していた 781 人のうち、172 人が鹿児島出身の者たちだった。戦前・戦後を合わせて 1 万 6703 人が鹿児島からブラジルへと渡った。鹿児島からブラジルに渡った人々は熊本や沖縄などに比べると少ないが、それでも戦前・戦後を合わせてブラジル移民輩出地域としては、上位 10 位以内に入る「移民が盛んな県」であった。その鹿児島県内で、特に移民を輩出していたのが川辺郡、姶良郡そして、奄美大島のある大島郡であった。市町村単位で見ると川辺郡の坊津町(現、南さつま市)、それから枕崎市(同)、それから大島郡の宇検村が続く。このように奄美は(主に宇検村だが)、鹿児島県内ではブラジル移民輩出が盛んな地域であった。⁽⁷⁾

(2) 奄美の移民村・宇検村

奄美からブラジルを目指した者は、最初のブラジル移民船「笠戸丸」に乗船していたのだろうか。残念なことに「笠戸丸」移民に奄美出身者は一人もいなかった。奄美からブラジルを目指すのは、笠戸丸移民から10年の後のこととなる。

10年後の1918年9月6日、讃岐丸という船が長崎を出港してブラジルへ向かった。この船に69人の奄美出身者が乗船していた。家長16人、配偶者及び子ども53人、合計69人は9月6日に長崎を出帆し、翌10月26日にブラジルのサントス港へ着く。これが最初の奄美からのブラジル移民である。

実はこれ以前に奄美からブラジルを目指した者がいたが、集団でのブラジル移民は先の讃岐丸移民が始まりとなる。以降、1934年までに120世帯698人がブラジルへと渡った。⁽⁸⁾ アジア・太平洋戦争が始まりブラジル移民自体が中断される。終戦後、1953年にブラジル移民が再開されると、奄美からも再びブラジルを目指す者があらわれた。奄美からの戦後ブラジル移民は1957年テゲルベルグ号に乗ってブラジルへと渡った赤塚弘とその家族5人である。以降、1959年までの間に47世帯174人がブラジルへと渡った。⁽⁹⁾

先に述べたように、奄美から最もブラジル移民を輩出したのは宇検村だった。奄美からブラジルを目指したのは167世帯872人、そのうち宇検村からは戦前、戦後合わせて85世帯492人がブラジルへと渡っている。宇検村からのブラジル移民数は奄美からのブラジル移民数の56%と過半数を超えており、宇検村は奄美における「移民村」であったことがわかる。

この人数は1965年に鹿児島県海外協会が発刊している『海外移住者名簿』に記載されている人数を集計したものである。筆者はブラジル・サンパウロにて、本名簿を基に2014年から聞き取り調査を行ってきた。その中で本名簿に記載されていない奄美出身の人々がいることがわかった。現在、筆者はサンパウロ移民資料館所蔵の移民名簿やブラジル・サントス港入管記録などを用いて、より正確な移民名簿を作成している。完成後は(若干だが)移民総数が増えることが予想される。⁽¹⁰⁾

III 調査概説

(1) 調査地域

本研究の調査として、筆者は2017年9月16日から9月27日までブラジルのサンパウロにて、主に宇検村出身者とその子弟を中心に聞き取り調査を行った。その間、奄美出身者とその子孫たちが毎年開催する運動会(9月24日)に参加をした。また、サンパウロに奄美出身者たちが建てた奄美会館建物を見学した。以下に本調査にて聞き取りを行った調査対象者概要を記す。

(2) 調査対象者概要

表1 調査対象者概要

	平均年代	出身地	人数
一世代	70代(68～79歳)	60%が宇検村	10
二世代	70代(50～76歳)	ブラジル	10
三世代	40代(18～68歳)	ブラジル	3
			計23人

聞き取りを行った調査対象者の概要は上記の通りである。聞き取り対象者の平均的な年代は一世が70代(68～79歳)、二世も70代(50～76歳)、三世に関しては、60代、50代、10代の3人から聞き取りを行ったため、このような平均値となった。出身地については、聞き取りは主に宇検村出身者の集まる「運動会」で行ったため、聞き取りを行った対象者の一世の7割が宇検村出身となった。宇検村出身以外の一世の出身地は名瀬市、笠利町、与論島の出身者となっている。また、二世、三世は当然ブラジル生まれである。本調査で聞き取りを行った二世の9割が、戦前にブラジルへ渡った奄美移民の子弟である。

IV 「UNDOKAI」運動会

(1) 概要

2017年9月24日(日曜日)、サンパウロ市の北東グアルーリョス地区にある「Kaikan KIYOWA」という名称の建物がある会場広場で、奄美出身者とその子弟による運動会が開催された。毎年9月の第3週の日曜に開催されるこの運動会は、今年で23回目を数える。運動会は「COMUNIDADE AMAMI DE VILA CARRÃO」、サンパウロ市内のヴィラ・カホン地区在住の奄美出身者の集まりである「COMUNIDADE AMAMI(コムニダーデ・アマミ)」が主催している。

(2) 「Kaikan KIYOWA」協和会館

サンパウロの北東部グアルーリョス地区を走る国道381号線を北に走り「81キロ地点」を右折。そこから側道に入ると、目印となる「Arouca Sao Paulo Club」というスポーツクラブが見えてくる。その隣に「Kaikan KIYOWA」(以下、会館)はある。会館が位置する側道の名前はRua Vila de Arouca、スポーツクラブ以外にめばしい建物もなく、看板もないのでうっかりすると見逃してしまいそうになる場所だ。

「Kaikan KIYOWA」は、協和農村文化協会(ASSOC. CULTURAL E AGRICOLA KIYOWA⁽¹¹⁾)が1980年に建設した建物であり、通常は同協会の集まりなどで使用されるが、この運動会のように、ほかの団体へ貸し会場として貸し出されることもある。賃貸料がいくらなのかはわからなかったが、コムニダーデ・アマミではこの会場を「10年ほど前から」運動会の会場として借りているという。その前はヴィラ・カホン地区の沖縄県人会館を借りていた。



写真1 「Kaikan KIYOWA (協和農村文化協会会館)」

(3) 「UNDOKAI」 運動会内容

筆者が運動会会場の会館に到着したのが9時8分、案内されていた運動会の開始時刻は9時。すでに100人ほどが集まっていたが、まだ開会する気配はない。入り口で若い男女が「ENTRADA UNDOKAI AMAMI」と書かれた入場チケットを販売していた。参加費は一人15レアル（日本円で約540円⁽¹²⁾）。参加費を支払うとプログラムとチケットの半券を渡され、会場へ入ることができる。なお、プログラムには「Não pagam as acima de 70 anos e crianças até 6 anos」とあり、70歳以上と6歳以下の子どもは支払いの必要はないと書かれている。

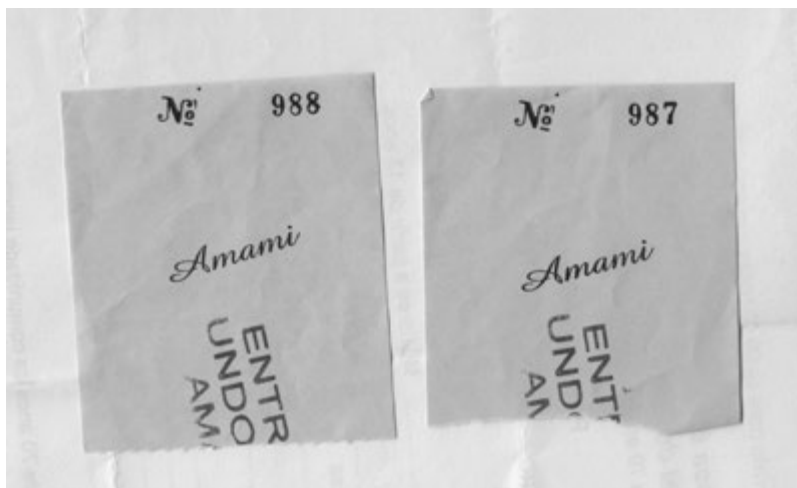


写真2 「半券」

会場は会館の前の運動場を使用。中央に約6メートルほどの紅白に塗られたポールが立てられ、その先に鯉のぼりの飾り付けがされている。そこから放射状に万国旗や色とりどりのリボンが結び付けられたものが会場の端々まで飾られる。この飾り付けのやり方はブラジルの日系社会で行われている運動会では一般的な飾り付けの方法である。そこから楕円形に石灰を用いて白線を描きトラックを作っており、日本の運動場と同じように設けが施されている。

そのトラックを囲むように参加者の車が駐められており、その車のそばにテントなどを組み立てて休憩所を各々で作っている。



写真3「運動会会場」運動場中央にポールが立てられ、その先端に鯉のぼり

(4) 参加者

運動会の参加者の構成は、在伯宇検村出身者の中でも、主に湯湾集落出身者の5家族の親族で構成されている。一家族あたり20～30人ほどで構成されており、参加者は多いときで200人を超えていたというが、今年(2017年度)は150人ぐらいで「去年より少ない」という話だった。

(5)「Programação」プログラム内容

運動会はまず国歌斉唱から始まる。最初はブラジル国歌である「HINO NACIONAL BRASILEIRO」、次に日本の「君が代」の順であった。その後、全員でラジオ体操を行う。

ラジオ体操を主導するのは三世の女性である。見よう見まねで覚えたであろうラジオ体操で皆を主導するが、参加者の9割以上が二世世代以上であり、ラジオ体操自体をしっかりと覚えている者がいないので、「なんとなく」の形で進んでいく。会の司会進行を行っている四世の女性(40代)がマイクを通じて筆者に、皆の前に出てラジオ体操のお手本をといるが、ラジオ体操の様子を撮影していたので断った。日本人なら正確なラジオ体操ができると、司会進行の四世女性は思ったのであろう。正確なラジオ体操がわからないまま、あちらこちらで笑い声が上がりながら準備運動の時間を終えた。ラジオ体操が終わると、プログラムはいよいよ運動会種目へと移る。以下がその内容である。

表2 「運動会プログラム内容一覧」

	種目名	参加資格	回数
01	Corrida de 50 metros 50 メートル走	Mulheres a partir de 13 anos 13 歳以上の女性	3 vezes 3 回
02	Corrida de 50 metros 50 メートル走	Crianças ate 12 anos 12 歳以下の子ども	3 vezes 3 回
03	Enchendo o Cesto ボール入れ	Todos a partir de 50 anos 50 歳以上全員	3 vezes 3 回
04	Prova da Taboada para crianças 計算競争	Entre 6 e 12 anos 6 ～ 12 歳の子ども	5 vezes 5 回
05	Prova do Aquele Abraco ハグ風船割り	Todos a partir de 13 anos 13 歳以上全員	3 vezes 3 回
06	Prova de Estourar Baloes 風船爆発競争	Crianças ate 10 anos 10 歳までの子ども	5 vezes 5 回
07	Corrida do Minhocao ミミズ競争	Todos a partir de 13 anos 13 歳以上全員	3 vezes 3 回
08	Centopeia para Crianças ムカデ競争	Crianças entre 10 e 15 anos 10 ～ 15 歳の子ども	2 vezes 2 回
09	Centopeia para Adultos ムカデ競争	Todos a partir de 16 anos 16 歳以上全員	3 vezes 3 回
10	Prova das Bruxas ホウキ競争	Todos a partir de 13 anos 13 歳以上全員	5 vezes 5 回
11	Corrida de 100 metros 100 メートル走	Homens a partir de 13 anos 13 歳以上の男性	4 vezes 4 回
12	Corrida do Elefantinho 象競争	Todos entre 13 e 60 anos 13 ～ 60 歳全員	2 vezes 2 回
13	Bola ao Cesto カゴ入れ	Crianças ate 12 anos 12 歳以下の子ども	1 vez 1 回
Intervalo para o Almoco 昼食 Homenagem as pessoas acima de 70 anos da comunidade japonesa Odori 70 歳以上の日本「Odori (踊り)」の会に敬意を表して			
14	Corrida com a Titia おばさんと走る	Crianças ate 6 anos 6 歳以下の子ども	3 vezes 3 回
15	Prova do Palhaco ピエロ競争	Todos a partir de 13 anos 13 歳以上全員	2 vezes 2 回
16	Prova Passar o Bambole フープ通し	Todos a partir de 10 anos 10 歳以上全員	2 vezes 2 回
17	Revezamento para Mulheres リレー (女性)	Mulheres entre 13 e 35 anos 13 ～ 35 歳の女性	1 vez 1 回
18	Prova do Equilibrio バランス競争	Todos a partir de 50 anos 50 歳以上全員	5 vezes 5 回
19	Rodar Pneu タイヤレース	Todos a partir de 13 anos 13 歳以上全員	2 vezes 2 回
20	Corrida Maluca para crianças チキチキマシン猛レース	Crianças entre 5 e 12 anos 5 ～ 12 歳の子ども	3 vezes 3 回
21	Prova do Balao 風船爆発競争	Todos a partir de 13 anos 13 歳以上全員	4 vezes 4 回
22	Pescaria 魚釣り競争	Todos a partir de 50 anos 50 歳以上全員	5 vezes 5 回
23	Prova da Taboada para adultos 計算競争	Todos a partir de 13 anos 13 歳以上全員	4 vezes 4 回
24	Corrida do Minhocao para crianças ミミズ競争	Crianças entre 6 e 12 anos 6 ～ 12 歳の子ども	2 vezes 2 回
25	Revezamento para Homens リレー (男性)	Homens entre 13 e 40 anos 13 ～ 40 歳の男性	1 vez 1 回
26	Cabo de Guerra 綱引き	Todos a partir de 13 anos 13 歳以上全員	2 vezes 2 回
27	Suzuware 鈴割り	Todos 全員	1 vez 1 回

COMUNIDADE AMAMI DE VILA CARRÃO – 23º UNDO-KAI		
Local: Kaikan KIYOWA		
Data: 24/09/2017 com início previsto para as 09:00 horas		
A contribuição por pessoa é de R\$ 15,00 e destina-se ao pagamento do aluguel do campo.		
Não pagam as pessoas acima de 70 anos e as crianças até 6 anos		
PROGRAMAÇÃO		
HINO NACIONAL BRASILEIRO		
HINO NACIONAL JAPONÊS		
01 - Corrida de 50 metros	Mulheres a partir de 13 anos	3 vezes
02 - Corrida de 50 metros	Crianças até 12 anos	3 vezes
03 - Enchendo o Cesto	Todos a partir de 50 anos	3 vezes
04 - Prova da Taboada para crianças	Entre 6 e 12 anos	5 vezes
05 - Prova do Aquele Abraço	Todos a partir de 13 anos	3 vezes
06 - Prova de Estourar Balões	Crianças até 10 anos	5 vezes
07 - Corrida do Minhocão	Todos a partir de 13 anos	3 vezes
08 - Centopéia para Crianças	Crianças entre 10 e 15 anos	2 vezes
09 - Centopéia para Adultos	Todos a partir de 16 anos	3 vezes
10 - Prova das Bruxas	Todos a partir de 13 anos	5 vezes
11 - Corrida de 100 metros	Homens a partir de 13 anos	4 vezes
12 - Corrida do Elefantinho	Todos entre 13 e 60 anos	2 vezes
13 - Bola ao Cesto	Crianças até 12 anos	1 vez
Intervalo para o Almoço		
Homenagem às pessoas acima de 70 anos da comunidade japonesa		
Odori		
14 - Corrida com a Titia	Crianças até 6 anos	3 vezes
15 - Prova do Palhaço	Todos a partir de 13 anos	2 vezes
16 - Prova Passar o Bambolê	Todos a partir de 10 anos	2 vezes
17 - Revezamento para Mulheres	Mulheres entre 13 e 35 anos	1 vez
18 - Prova do Equilíbrio	Todos a partir de 50 anos	5 vezes
19 - Rodar Pneu	Todos a partir de 13 anos	2 vezes
20 - Corrida Maluca para crianças	Crianças entre 5 e 12 anos	3 vezes
21 - Prova do Balão	Todos a partir de 13 anos	4 vezes
22 - Pescaria	Todos a partir de 50 anos	5 vezes
23 - Prova da Taboada para adultos	Todos a partir de 13 anos	4 vezes
24 - Corrida do Minhocão para crianças	Crianças entre 6 e 12 anos	2 vezes
25 - Revezamento para Homens	Homens entre 13 e 40 anos	1 vez
26 - Cabo de Guerra	Todos a partir de 13 anos	2 vezes
27 - Suzuwari	Todos	1 vez
ESTAREMOS VENDENDO, DURANTE A PROGRAMAÇÃO, UMA RIFA NO VALOR DE R\$ 7,00 CADA NÚMERO		
ATENÇÃO:		
Em caso de chuva, o Undo-kai terá prosseguimento no salão coberto.		

写真4「プログラム」

運動会のプログラム種目は全部で27種。午前中の種目はまず13歳以上の女性による50メートル走から始まり、続いて12歳以下の子どもたちによる50メートル走がそれぞれ3回ずつ行われる。参加人数にもよるが、一回につき5～8人ずつで走る。走り終えてゴールにたどり着くと、着順により賞品が渡される。賞品の内容は主に洗剤などの日用品だが、子どもにはお菓子やジュースが渡される。着順の早いものほど、賞品は豪華（品数が多いなど）となる。

その後、ブラジル人の挨拶であるAbraco（ハグ）を生かした風船割り種目が行われる。この種目は13歳以上は全員参加となっている。参加している奄美出身者とその子弟が連れてきた非日系のパートナーやその家族も参加し、毎年一番盛り上がる種目なのだという。参加者は二つのチームに分かれ、どちらが早く風船を割り終えるかを競う。風船が一つ割れるたびに大歓声上がり、見ている方も応援で盛り上がる。午前の13番目の種目である12歳以下の子どもたちによる「Bola ao Cesto（カゴ入れ）」終了後、昼の休憩となる。

昼休憩は主要5家族が各家族ごとに持参してきたテントや、会場に備え付けられたテーブルと椅子に集まり、各々が持参した昼食をとる。この食事を持参することを「MOTIYORI（持ち寄り）」といい、ブラジル日系社会の集まりでは一般的に行われている食事形態である。持ち寄られる品は、一世が好む日本食（卵焼きや塩むすび）と、二世以上にはブラジル食（コッシーニャと呼ばれる揚げ物や焼い



写真5「持ち寄り」おにぎりや漬物とブラジルの揚げ物料理である
コッシーニャなどが並ぶ

た肉など）が用意されている。それに Bolo（ボーロ）というケーキ類などの甘いものも、ブラジルらしく食べきれないほど用意される。飲み物には炭酸類と砂糖入りのコーヒーが必ず用意される。この持参される食事には、奄美の食材や料理は見かけなかった。

昼休憩時間が 20 分ほど過ぎた頃、参加者の一人に「オドリが始まるよ」と声をかけられた。会場の中央部に二世女性を中心に集まりができ、その集まりはやがて一つの列となっていた。「オドリ」の参加者が一列に大体整列すると、音楽が始まる。流れてきたのは「炭坑節」であった。二世を中心に、運動会前になると「炭坑節」の練習が行われ、それが「オドリ」として披露されるのである。

以前は、奄美出身の女性移民により奄美のシマの踊りを教える「教室」が開かれていた。しかし、教え手であったその女性が高齢になり教えるのが難しくなってくると、ビデオ映像を用いる踊りの練習会へと形が変わっていったという。教え手の高齢化に併せて、実際の踊り手たちも高齢化したため、練習する踊りのレパートリーが激減した。数年前から運動会では「炭坑節」だけを踊るようになったという。「炭坑節」はコムニダーデ・アマミの集まりに限らず、日系社会全体の「MATSURI(祭り)」などでも踊られているため、二世や三世のほか、日系社会に近いところにいる非日系のブラジル人にも馴染みがある。そのため、現在、運動会では奄美のシマの踊りではなく「炭坑節」のみが昼食後の余興として採用されている。

(6) 「RIFA」 富くじの販売

午後の種目が終了後、運動会開始前に販売されていた「RIFA」（以下、リッファ）と呼ばれる富くじの当たり番号の発表が行われる。富くじは一番番号あたり「R\$7,00（日本円で約 300 円）」で販売され、当選した際に景品と交換する。景品の内容は、競技の賞品と同様、主に日用品などである。リッファの売上金は、主に運動会の運営費に充てられる。近年、運動会参加者が減少傾向にあり、参加費だけでは会の運営が困難になってきたため、このような富くじの販売を行っているという。リッファによ

る運営費徴収は日系社会に限らず行われている。ブラジル、特にサンパウロ市内は街中に宝くじ販売所がある。ブラジルの人々は「富くじ」など賭け事を好む国民性を持っており、それを利用した形で、うまく運営費を作り出しているのである。

(7)「奄美」Tシャツ

運動会に参加している奄美出身者とその子弟たちは揃いのTシャツを作成し、それを自分たちの集まりであるコムニダーデ・アマミのユニフォームとして着用している。このTシャツは数年前に作られたというが、参加者に誰が主導して作ったのかと質問すると「そういうことをまとめる人たちが⁽¹³⁾いる」と返され、具体的に誰がということはわからなかった。しかし、インタビューを重ねるとヴィラ・カホンで頼母子講を開催している一家を中心に、運動会などが企画されるということがわかった。

運動会でこのTシャツを着用しているのは主に二世世代であり、彼らの多くが、主言語はブラジルの公用語であるポルトガル語を使用している。日本語は、両親や祖父母との生活で使用していた程度で話すことができるものがほとんどである。読み書きについては、個人差があるが、ほとんどが日本語学校で日本語を学んでおらず、ひらがなを多少読むことができる程度である。漢字についてはほとんどが読めない。しかし、彼らは「奄美」という言葉（文字）は知っており、ユニフォームTシャツのデザインとして採用している。採用にあたり、アルファベット表記の「AMAMI」ではなく、わざわざ漢字の「奄美」を使用している。

この「奄美」について、なぜ「奄美」なのかと質問したところ、Tシャツを着用していた二世、三世たちは「Eu sou Brasileiro(a) e Shimatchu (私はブラジル人、そしてシマツチュです⁽¹⁴⁾)」と笑いながら答えてくれた。二世たちは、奄美出身の親から奄美の話を聞かされていたので、自身にもブラジル人としてだけでなく「シマツチュ（奄美人）」としての気持ち・意識（アイデンティティ）があるのだという。



写真6 「奄美の文字がデザインされたTシャツ」

V 奄美会館

ブラジル在住の奄美出身者たちは、コムニダーデ・アマミより以前に、同郷団体である「ブラジル奄美会」を組織している。会では 1978 年に会員の悲願であった会館を建設し、「奄美会館」と名付けた。奄美会館はサンパウロ市の東部、カホン (Carrão) 地区にある。カホン地区には沖縄からの移住者が多く、沖縄県人会の支部 (沖縄県人会ヴィラ・カホン支部) も置かれている。多くの沖縄系移住者が住むこの地区では、かつて日本人街であったリベルダーヂの駅前広場と同様に、早朝の運動場や公園でラジオ体操に励む日系人の姿を見ることができる。奄美会館はこのような場所に建てられた。

(1) ブラジル奄美会

ブラジル在住の奄美出身者の郷友会である「ブラジル奄美会」(以下、奄美会) が結成されたのは、1969 年 10 月 5 日。⁽¹⁵⁾ 奄美出身者たちの親睦融和を目的に設立された同会では、場所の良い個人宅や沖縄県人会会館を借りて活動していたが、次第に会館の設立話が持ち上がり、会館設立のための資金を、ブラジルだけでなく日本の関東や関西、さらには奄美にまで出向いて募った。ブラジルの不安定な経済状況に翻弄されながら紆余曲折を経て、1978 年「ブラジル奄美出身者移民六〇周年祭典」と同時に「ブラジル奄美会竣工落成式」が盛大に挙行された。⁽¹⁶⁾

(2) 奄美会館

奄美からブラジルへの移住が始まって 45 年目の 1964 年、サンパウロ市内にあるイビラプエラ公園で奄美出身者たちの「親睦融和の輪を広げよう」と会合が開かれた。発起人の島純雄 (宇検村出身) ほか 9 人の有志を中心に「奄美同志会」が組織され、それから 5 年後の 1969 年に「ブラジル奄美会」を正式に発足させた。そして「親睦融和伝統文化の継承、お互いの心のよりどころ」として会員が寄り合う会館をつくろうと、まずは土地の購入が行われた。以後、資金不足やインフレにより延期に延期を重ね、約 9 年の歳月をかけて「奄美会館」が完成する。⁽¹⁷⁾

1978 年に落成した「奄美の人々の心の安息所」奄美会館の落成式は 6 月 11 日、先述したように奄美移住者 60 周年の記念式典と合同で盛大に執り行われた。以後、会館ではシマの踊りなどの文化活動や集会のほか、奄美出身者の子弟の結婚式会場としても使用されてきた。それだけでなく、地域の祭りなどで広く利用されてきた。会館の管理は、落成当時ブラジル奄美会の事務局長であった宇検村湯湾出身の直義実氏が行った。

直義実氏は宇検村湯湾出身で 1925 (大正 14) 年 2 月、15 歳のときに両親と共にブラジルへと渡った。在伯鹿兒島県人会誌『在伯鹿兒島県人発展史 拓魂』によると、直義実氏は「ブラジル奄美会の生き字引」的存在であったという。⁽¹⁸⁾

ここで直氏について少し記しておく。直氏は渡伯直後、モジ線マタルナ耕地に配耕された。その後、パウリスタ延長線、ソロカバ線、ノロエステ線沿線を転々と渡り歩いた。当時の生活は「食べることでひと苦勞する苦難の連続」であったという。1934 (昭和 9) 年、同船者福山英吉氏の義妹である福山春子さんと結婚、三男三女に恵まれた。子どもの教育のため「上聖 (サンパウロ市に居を移すこと)」し、ヴィラ・カホンに居を構えた。直氏の子どもたちは、それぞれはハム工場経営、観光バス事業経営、陸軍中尉退役後フィアット自動車会社の工場支配人、会計士などで活躍した。

(3) 奄美会解散

2002年にブラジル奄美会が「突然」解散した。解散と同時に奄美会館は日系福祉団体であるサンパウロ日伯援護協会（以後、援協⁽¹⁹⁾）に「譲渡」された。この会館譲渡については、多くの奄美出身者から「（会館譲渡を）新聞で知った」という証言が聞かれた⁽²⁰⁾。当時の奄美会会員への周知もあまりされないまま、会館は援護協会に譲渡され、以後、奄美出身者たちの「公式な」集まりは途絶えてしまった。

援協に譲渡されたのち、元奄美会館は援協の事業所の一つとして現在も運営されている。その事業所名は「奄美事業所」と名付けられ、「奄美」の名が残されている。

元奄美会館（以下、奄美事業所）は、文字通り、奄美出身の移住者たちの集会所として使われていたため、建物には大きな舞台を擁したサロン（講堂）やキッチンが備えられているほか、いくつかある部屋は現在、パソコン教室、図書室、自習室などとして使用されている。援協では、2004年6月からサンパウロ市と提携し、奄美事業所をカホン地区の貧困世帯の子どもたちの教育支援の場として機能させている。地域に広く開かれ、利用されている奄美事業所は、周辺の人々や利用者に「援協—奄美（実際にはアルファベット表記で Enkyo-Amami）」と呼ばれ、「奄美」の人々の歴史が名称として遺されている。

まだ「奄美会館」であった頃に会館を管理をしていた直氏の自宅は、奄美事業所から徒歩20分のところにある。筆者は本研究・調査のため直氏をブラジル滞在中数度訪ねたが、残念ながら会うことができなかった。



写真7 「元「奄美会館」」

VI 考察

(1) 「COMUNIDADE AMAMI」の奄美アイデンティティ

毎年「UNDOKAI（運動会）」を開催している主催グループ、コムニダーデ・アマミは、カホン地区在住の奄美（主に宇検村）出身者によって組織されている。コムニダーデ・アマミの主要メンバーは、戦前にブラジルへ移住した宇検村芦検集落出身者の子弟たちによって構成されている。芦検集落出身の数家族を中心とした、同郷者とその子弟による集まりがコムニダーデ・アマミなのである。

彼らは、月一度、メンバーの一人（芦検三世）の自宅に集まり頼母子講を開催する。主催しているのは芦検集落出身 N 氏（1935 年渡伯）の子弟で、三世の姉妹である。N 氏の三世姉妹がコムニダーデ・アマミの頼母子講を取り仕切る以前は、彼女たちの母親とその兄弟によって頼母子講が開催されていた。コムニダーデ・アマミの頼母子講は主に 1935 年にブラジルへと渡った N 氏の子弟たちによって取り仕切られている。コムニダーデ・アマミでは、頼母子講のほかに、クリスマスや各々の誕生会には、メンバーの家に集まって交流を深める。

コムニダーデ・アマミの集まりで交流をするメンバー構成は、主に芦検出身者とその子弟である親族を中心としているが、稀に芦検集落以外の奄美出身者家族も会に参加する。ただし、この参加者のほとんどが宇検村の出身者とその子弟であり、宇検村以外の奄美出身者とその子弟がこの会に参加したという話は聞かなかった。

メンバーのメインは戦前のブラジル移民の二世、三世であり、彼らは「あなたは何人ですか」と聞かれると、当然ブラジル人だと答える。彼らの祖父母や父母について質問すると、「ジッチャン（祖父）、バッチャン（祖母）、パパイ（父）、ママイ（母）」は「アマミ」人であり「カゴシマ」人だという。

彼らの中には、日本には「行ったことがある」が奄美は「行ったことがない」という人も多数おり、奄美に関心があっても、「日本」の中央から遠く離れた奄美まで行くことが困難なのだ。訪れたことのない奄美について、知っている（関心がある）ことは「海がきれい」だということ以外、彼らに奄美の情報が入っていない。すでに直接奄美の文化等々を「知っている」一世の多くが鬼籍に入ってしまった、今や奄美の文化活動を享受できる環境は、ここにはない。

しかし、カホン地区には彼らの祖父母や両親が毎週のように集っていた奄美会館が、今も「奄美事業所」という名称で存在している。二世、三世が自分たちの結婚式などで利用してきた会館が、「Amami（奄美）」という名称を保持したまま、彼らの生活圏に存在している。彼らにとって馴染みのある「Amami（奄美）」という言葉が、彼らの生活圏内に今もそのまま保存・継承されているのだ。

(2) 宇検村におけるブラジル移民への意識

次に、母村である宇検村とブラジル在住の奄美出身者のつながりについてみる。

①「伯国橋」ブラジル橋

アジア・太平洋戦争終戦後、戦禍に傷ついた故郷を救うため、ブラジルの宇検村出身者たちは集落復興のため、義援金を集めることを決め、総額 4 万 1500 クルゼイロ（当時の日本円で 25 万 4975 円）を宇検村湯湾区長宛に送った。宇検村役場で保管されている湯湾区長宛の「郷里義援金懇志に付て」という書簡には、発起人 3 人の氏名と、この義援金集めに関わった 54 人の氏名そしてそれぞれの寄付金額が記されている。⁽²¹⁾ それだけではなく、ブラジルへ移住する際に盛大に送り出してくれた故郷

の人々に対するお礼の言葉も記されている。宇検村ではブラジルから届けられた義援金の使い道について協議に協議を重ね、戦火により焼け落ち、村を分断してしまった湯湾川に架かる橋の建設費に充てることとなった。新しく架けられた橋は「伯国橋（「ぶらじる橋」とも刻まれている）」と名付けられた。遠くブラジルにいる同胞への感謝の気持ちから「集落の総意」で決まったという。⁽²²⁾

②宇検村ブラジル訪問団

奄美の移民村である宇検村では、これまで何度も訪問団を結成しブラジルを訪れている。村の広報誌「広報うけん」⁽²³⁾によると 1994 年ブラジルで開催された「在伯奄美大島移住七十五周年記念式典」（以下、75 周年式典）に当時の宇検村村長である元山三郎氏が出席している。記念式典は午前 10 時から始まり、約 500 人の奄美出身者や二世、三世が集まり大盛況だったという。主催は奄美交友会とある。「ブラジル奄美会」とは別に、主に宇検村出身者が集まって組織した、もう一つの奄美出身者の「郷友会」である。奄美交友会主催で開催された式典の会場には、ヴィラ・カホン日伯文化体育会館が使用された。奄美校友会の当時の会長は高田基治（湯湾出身、1939 年渡伯）であった。式典の最後は「島同様、六調で締めくくった」という。宇検村訪問団は帰国後、村の広報誌に「遠く離れても島を想う心は同じ」との見出しで記事が掲載されている。

1998 年 10 月に開催された「奄美移住八〇周年記念式典」にも、宇検村から慶祝団が送られている。⁽²⁴⁾ このように、宇検村では村一丸となってブラジル移住者との結び付きを大切にしてきた。

一方、ブラジルの奄美出身者の中でも当然に、宇検村から村長がブラジルまで来てくれたという想い出は今も忘れられないものとなっており、75 周年式典からすでに 25 年の月日が経過したが、元山村長の名前は必ずといっていいほどブラジル在住の奄美出身者から聞かされる。

③2010（平成 22）年 10 月の「奄美豪雨災害」

2010 年 11 月 12 日ブラジルの邦字紙に「奄美大島へ義援金募る」と題し、同年 10 月に奄美地方を襲った集中豪雨災害のニュースが報じられた。⁽²⁵⁾ 奄美地方を襲った豪雨は、死者が出るほど甚大な被害を出し、在伯奄美出身者たちは心を痛めた。早速、在伯奄美出身者たちの中心的存在である肥後氏（笠利町出身）と青山氏（与論島出身）そして宇検村出身の玉利氏が奄美へ義援金を送ろうと、邦字新聞で在伯の奄美関係者へ向けて、募金を呼びかけた。⁽²⁶⁾ 同年 12 月までに約 30 人の寄付者から 50 万を超す義援金が集まり、宇検村出身者とその子弟たちからの義援金を取りまとめた玉利氏が、在伯奄美出身者の代表として奄美へ送金を行った。⁽²⁷⁾

義援金は 12 月 10 日付で受領され、同月 12 日付で玉利氏の基へ奄美市豪雨災害対策本部の長を務めた奄美市長の朝山毅氏から書簡が届いた。そこには義援金の領収書とともに手紙が添えられていた。その手紙には、ブラジルから届けられた支援は奄美の人々に「勇気と元気を、地域で支え合う島の「結い」の心」として届き、遠く離れたブラジルに暮らす奄美の人々の「結い」の心、その精神への感謝の気持ちが記されていた。⁽²⁸⁾

この手紙を受け取った玉利氏は、懐かしい母村と今も心は繋がっているのだと、それから幾度も宇検村村長宛にブラジルの近況を綴った手紙を送った。宇検村からは「つど」ではないが『広報うけん』が数冊、ブラジルの玉利氏のもとへと届けられるようになった。この義援金送金を機に、玉利氏が「個人的」ではあるが宇検村とブラジルの奄美出身者（主に宇検村出身者）を繋ぐキーパーソンになったのである。

(3) 宇検村とブラジルの現在

2017 年 10 月 13 日、筆者はブラジルで撮影した運動会の映像資料を宇検村で上映するため、宇検村教育委員会と共催で「奄美ブラジル移民談話会」を開催した。目的は宇検村在住のブラジル移民を送り出した方々に、ブラジル在住の宇検村出身者やその子弟たちの現在の映像を見てもらい、宇検村のブラジル移民の記憶の収集を行うためであった。宇検村のブラジル移民の歴史に興味のある方や、宇検村在住の日系ブラジル人が約 20 人ほど集まり、映像上映後は各々のブラジル移民にまつわる思(29)い出話に花を咲かせた。

参加者は自宅にあったブラジル移民の写真や手紙を持参し、これは誰それから届いたもので等々、筆者に説明をしてくれた。宇検村ではこれらの資料を使って 2018 年度に「宇検村ブラジル移民企画展」を開催することになり、現在その準備に追われている。

また、2018 年は宇検村だけでなく奄美からのブラジル移民 100 周年にあたる。それだけでなく冒頭でも述べたように「ブラジル日本人移民 110 周年」という大きな節目の年である。

2017 年 4 月、在伯鹿児島県人会の役員がこれまでの一世を中心とした構成から一新し、二世を中心とした役員構成となった。会長には日系三世である上園モニカみちえ氏が就任した。初めての女性会長の誕生であった。また、副会長には奄美二世である文岡セルジオ正樹氏が就任した。正樹氏の父勝氏（生勝出身）は 1959 年にコチア青年単身移民としてブラジルへ渡り、ブラジルで湯湾出身の賀津子さんと結婚した。正樹氏は勝氏の長男として生まれた。日本へは 90 年代に来日し、7 年ほど住んでいたが、両親の故郷である奄美には 2016 年に初めて訪れた。

2018 年 7 月下旬にサンパウロで開催される世界最大の日系イベント日本祭りの会場で、「日本移民 110 周年記念式典」が催されることになり、在伯鹿児島県人会でも鹿児島県知事を招聘することになった。正樹氏は、奄美を代表して宇検村村長にも訪伯と記念式典への参列を呼びかける招待状を送った。宇検村村長の元田信有氏はそれに応え、村長のほか、村野巳代治教育長、喜島孝行村議会議員、渡博文総務企画課長、内田健治総務企画課職員の総勢 5 人の慶祝団を結成し、7 月 19 日にブラジルへと出発した。ブラジルに到着した村長ら慶祝団は、在伯奄美出身者たちの熱烈な出迎えを受け、21 日から 22 日かけて日本移民 110 周年関連の式典等に参加、22 日には在伯奄美出身者による「移住 100 周年」の祝賀会に参加した。これについては、別の機会で述べたい。

このように、宇検村では村長ら慶祝団のブラジル訪問を機に、村民一体で盛り上がりを見せており、慶祝団が帰国後に持ち帰った資料を含めて、先に述べた「宇検村ブラジル展」が予定されている。この慶祝団と在伯の奄美出身者とその子弟の交流により、新たな交流の機会が生まれることが期待される。(30)

おわりに

2010 年以降、奄美とブラジルを繋ぐキーパーソンとなった玉利氏のもとへ、宇検村から広報誌が数冊届けられるようになった。しかし玉利氏はその広報誌を「こんなに届いても、もう日本語をわかる人は私たちしかおらんから、もらっても誰も読めないんですよ」と言い、対応に困っていた。事実、宇検村出身者とその子弟を中心とした奄美出身者のコミュニティであるコムニダーデ・アマミでは、その構成員のほとんどが二世以下であり、そこで話される言語はポルトガル語が主体である。戦前、

日本語教育を禁止された二世代の人々は、両親や祖父母とのコミュニケーションのため、「多少」の日本語を話すことができるが、読み書きについては、日本語教育が禁止されていたこともあって「ひらがな」を読むことができるものも少ない。

ブラジルで生まれた彼らにとって、親や祖父母から奄美や宇検村の話を聞かされていたこともあり、奄美に興味関心はあるが、行政の発行する広報誌などではなく、インターネットを介した写真や動画などの情報がより好まれている。そのため、玉利氏のもとに届く宇検村広報誌は、奄美の子弟たちに「渡すこと」が少ないのだという。

しかし、二世、三世たちはインターネットを介し、今やポルトガル語で奄美を紹介する動画やサイトが存在することもあり、彼らはそこから祖父母や両親の故郷であり、自身のルーツでもある「奄美」の情報を得ている。筆者は SNS を通じてブラジル在住の二世、三世たちと交流を図っているが、彼らの SNS ではそういった奄美の情報が毎日のようにシェアされ、彼らの子どもたちである四世、五世たちも奄美を目にする機会を得られている。そして、故郷である奄美に災害が起こったときなど、一世を中心に支援する体制が整えられている。世代の中心はすでに一世から二世、三世の時代になっているが、日本のちょうど反対側にあたるブラジルに、奄美の「応援団」が多数存在していることは、奄美の人々にとって非常に心強く、人口減少など様々な問題を抱えているシマの可能性の一つとして位置付けられている。

2018 年 7 月の宇検村村長ら慶祝団帰国後には、宇検村でブラジル奄美移民を扱った企画展示が開催され、奄美内でのブラジル移民への注目度も一層増すことであろう。これまで幾度となくブラジルと奄美の人々は交流を図ろうと模索してきた。奄美を特徴付ける島唄や三線などの文化継承は途絶えてしまっているが、今もわずかに「奄美」という名称で、奄美アイデンティティーがブラジルで受け継がれている。

これまでみてきたように、ブラジル奄美移民は母県である鹿児島県人としてのアイデンティティーではなく、奄美というアイデンティティーを今日まで受け継いできた。一世は奄美だけでなく、出身集落のアイデンティティー（例えば宇検村の湯湾、芦検など）を持ち、何よりもそれを大切に保存してきたが、二世以降については、奄美系ブラジル人として、まずは「奄美」のアイデンティティーが自分自身のルーツとして存在していた。同じ母県である鹿児島県移民とは、異なるアイデンティティーを持つという特徴があることがわかった。この特徴は奄美移民だけにみられるものだろうか。残念ながら今回の調査では、そのあたりまで調査・研究を進めることができなかった。母県移民とのもう少し具体的な差異についてや、沖縄系移民との違いなど、今後の調査・研究で明らかにしていきたい。

最後に、2018 年のブラジル奄美移民 100 周年を機会に、奄美の若者たちとブラジルの奄美系二世、三世たちが、次の 100 年の歴史を新たに繋いでいけるよう、奄美の人々が持つ「結い」の心・精神に期待したい。

謝辞

本研究は 2017 年度非文字資料研究センター奨励研究の研究費支援を受けて作成したものである。ブラジル国サンパウロでの調査・研究にあたり、在伯奄美出身者の方々には多大なるご協力を賜った。奄美調査では、鹿児島県宇検村の元田信有村長はじめ村民の皆さまにご協力いただいた。特に宇検村

教育委員会事務局の渡聡子氏には多大なるご協力を賜った。また調査・研究の全てを通して、指導教員の安田常雄先生には細やかな指導をしていただいた。心より感謝申し上げたい。

注

- (1) 「サンパウロ新聞」2018年7月25日付
- (2) 原口邦紘「移民研究と史料―鹿児島県の場合―」『海外移住資料館 研究紀要』第4号39-52頁。「戦前県別移住者数1899(明治32)–1941(昭和16)」39頁と「戦後県別移住者数1952(昭和27)–1993(平成5)」40頁の鹿児島県人の人数を足したもの。
- (3) 田島康弘「奄美とブラジル移民」『鹿児島大学教育学部研究紀要 人文・社会科学編』第48巻15-33頁
- (4) 宮内久光「近代期における奄美大島宇検村からの移民について」『琉球大学法文学部人間科学科紀要』第36号17-50頁
- (5) 注(4) 宮内、前掲書18頁
- (6) 田島康弘「関西における奄美郷友会の実態」『鹿児島大学教育学部研究紀要 人文・社会科学編』第43巻1-19頁
- (7) 注(3) 田島、前掲書
- (8) ブラジル鹿児島県人会『ブラジル鹿児島県人会 創立90周年記念誌』88頁
- (9) 注(3) 田島、前掲書によると、戦前・戦後を合わせて167世帯872人がブラジルへ渡っている。
- (10) 鹿児島県海外協会『海外移住者名簿 1965』では、奄美出身者ではない者(原籍が奄美以外)も「構成家族」として含まれているため、彼らを除いた数と名簿に記載されていない奄美出身者の数のどちらが多いかは現在のところ確認できていない。
- (11) 協和農村文化協会(ASSOC. CULTURAL E AGRICOLA KIYOWA)とは、サンパウロ市北部カンタレイラ地域にて、1950年、12人の沖縄県移民により組織された相互扶助団体。現在の会館は1980年建設。
- (12) 1レアル約36円(2017年9月時点)
- (13) 聞き取り調査によると運動会などを取り仕切るのは個人として「誰か」ということではなく、「まとめる人」「世話をする人」「世話人」と呼ばれる数人のグループ(集団)が存在することがわかった。
- (14) 奄美では奄美人のことを「シマッチュ」と表現することが多い。主に地域紙(南海日日新聞)などで使用されている。この「シマ」は島(奄美大島や徳之島)を表すのではなく、主に自身の出身村や出身集落を指す場合が多い。ただし「ヤマトンチュ(日本本土)」の人々に対しては、奄美地域を指すこともある。
- (15) 藤原南風『新奄美史 上巻』282頁
- (16) 注(15) 前掲書280頁
- (17) 注(15) 前掲書282-284頁
- (18) 白石蜜義編『在伯鹿児島県人発展史 拓魂』165頁
- (19) サンパウロ日伯援護協会とは、1959年、当時の日本人移民社会「コロニア」の代表32人により日本移民の援護救済を目的として設立された組織。当初は、ブラジルへ到着したばかりの日本人移民支援を主な目的とし、サントス港へ上陸した移民の世話や「移民の家」と呼ばれる移民収容施設への収容業務等を行っていた。その後、福祉事業を展開し、様々な困難を抱える人々の支援のほか、1960年からは医療活動にも携わるようになり、1972年日本移民援護協会から現在の名称であるサンパウロ日伯援護協会へと改称。現在ではブラジル日系社会を代表する公益社会福祉法人として、医療と福祉の面で日系社会だけでなくブラジル社会を支える団体となっている。
- (20) 突然の援協への会館「譲渡」は、在伯の奄美出身者とその子弟に衝撃を与え、ある意味で「事件」となってしまった。奄美の人々の間に今も遺恨が残されている。この件については改めて述べたい。
- (21) 宇検村村役場保存文書「郷里義援金懇志に付て」1954年5月付 発起人は渡里良英、登伊佐美、徳元彦の3人。

- (22) 宇検村村役場保存文書「義援金に対するお礼状」1954年6月10日付 湯湾区長和田一男ら代表5人から「在伯湯湾人会」代表登伊佐美ら発起人3人に宛て手紙が送られている。また、「朝日新聞」2001年4月18日、19日、20日付で「伯国橋 移民の村・宇検村」全3回の連載記事を掲載。
- (23) 「広報うけん」1994年5月号。「広報うけん」では、それ以前にもブラジル移民を扱った記事を見ることができる。例えば、1975年7月号では「今浦島の倉元さんら14人 半世紀ぶりに里帰り 南米ブラジルから」と題し、1918年讃岐丸で最初にブラジルへ渡った倉元さんら14人の一時帰国（57年ぶり）を報じるなど、折に触れブラジル移民を紹介している。
- (24) 『宇検村誌 自然・通史編』680頁では「平成十一年（一九九九）」とあるが、実際には1998年10月開催。また、この奄美移住80周年記念式典に際し、南海日日新聞記者が慶祝団に同行し「奄美移民80年の軌跡 ブラジルの大地で」と題し、28回にわたって誌面でブラジル奄美移民特集が組まれた。
- (25) 「奄美豪雨災害」とは2010（平成22）年10月に発生した記録的な集中豪雨のこと。「平成22年10月奄美豪雨災害の検証（記録誌）」（平成25年3月奄美市発刊）によると、死者3人のほか住宅被害約800棟、公共土木関係や農林水産関係の被害を合わせた総被害額は約123億6200万円に上る大規模な災害であった。台風による災害を多く経験している奄美地方でも、これまで経験したことのない大災害となった。
- (26) 「ニッケイ新聞」2010年11月11日付、「サンパウロ新聞」2010年11月12日付
- (27) 「ニッケイ新聞」2010年12月2日付
- (28) 玉利氏の自宅には、奄美市長から送られてきた「10・20 奄美市豪雨災害資料」「玉利氏宛 奄美市災害対策本部長 奄美市長 朝山毅からの手紙」「領収証」が大切に保管されている。
- (29) 「南海日日新聞」2017年10月14日付
- (30) 「奄美新聞」2018年7月28日付記事によると、元田宇検村村長は二世らからの歓迎を受けて「ルーツの奄美や宇検村を大事にしていると感じた」「移民の歴史や宇検村との交流などを、次世代にどう引き継いでいくか。今後も人と人のつながりを大切に交流していきたい」と述べ、宇検村でこれまでの交流の様子などを展示する「ブラジル展」を開催する意向を示した。

参考文献

- ブラジル鹿児島県人会 1988 『ブラジル鹿児島県人会 75年の歩み 1913-1938』 ブラジル：ASSOCIACAO CULTURAL KAGOSHIMA DO BRASIL
- ブラジル鹿児島県人会 1993 『ブラジル鹿児島県人会 80年の歩み 1913-1993』 ブラジル：ブラジル鹿児島県人会
- ブラジル鹿児島県人会 1998 『ブラジル鹿児島県人会 85年の歩み』 ブラジル：ニッパク・グラフィック社
- ブラジル鹿児島県人会 2003 『ブラジル鹿児島県人会 創立90周年記念誌』 ブラジル：トッパン・プレス社
- ブラジル鹿児島県人会 100周年記念誌編集委員会 2015 『ブラジル鹿児島県人会 創立百周年記念誌 1913-2013』 ブラジル：ブラジル鹿児島県人会
- 藤原南風 1980 『新奄美史 上巻』 鹿児島県：奄美春秋社
- 丸山浩明編 2010 『ブラジル日本移民 一百年の軌跡一』 東京：明石書店
- 白石蜜義編 1979 『在伯鹿児島県人発展史 拓魂』 ブラジル：サンパウロ新聞社
- 宇検部落郷土誌編集委員会 1996 『宇検部落郷土誌』 鹿児島県：宇検村
- 宇検村誌編纂委員会 2017 『宇検村誌 自然・通史編』 鹿児島県：宇検村教育委員会
- 原口邦紘 2009 「移民研究と史料 一鹿児島県の場合一」 横浜：国際協力機構横浜国際センター海外移住資料館『JICA 横浜 海外移住資料館 研究紀要』 第4号
- 宮内久光 2017 「近代期における奄美大島宇検村からの移民について」 沖縄県：琉球大学法文学部『琉球大学法文学部人間科学科紀要』 第36号
- 田島康弘 1991 「関西における奄美郷友会の実態」 鹿児島県：鹿児島大学教育学部『鹿児島大学教育学部研

究紀要 人文・社会科学編』 第 43 卷

田島康弘 1997 「奄美とブラジル移民」 鹿児島県:鹿児島大学教育学部『鹿児島大学教育学部研究紀要 人文・社会科学編』 第 48 卷